第３５号　　平成２９年１２月発行

みおしえ

埼浄青

希代な念佛行者
名僧　徳本上人

平成29年は徳本上人200回忌です。

埼玉教区浄土宗青年会

http://www.saijousei.com

ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞと思い取りて申す外には別の仔細候わず

（法然上人御遺訓　一枚起請文）

《意味》

阿弥陀仏の極楽浄土へ往生を遂げるためには、ただひたすらに「南無阿弥陀仏」とお称えするのです。一点の疑いもなく「必ず極楽浄土に往生するのだ」と思い定めてお称えするほかには、何も細かなことはありません。

皆さまの中には、回忌の法要を一つの節目と考え、お気持ちに整理をつけようとされる方もいらっしゃるかと思います。例えば、「納骨も終えたのだから、三回忌にもなったのだから、悲しんでばかりはいられない」という様に。また、周りからも「いつまでもメソメソしていると、故人も心配して成仏できないよ」と言われ、悲しむことが何だか悪いことでもしているかの様に扱われ、自分の正直な気持ちにふたをして生活されている方もいらっしゃるかもしれません。しかしながら私は、いつまでも整理がつかない気持ちがあってもいいと思うのです。泣いて、悲しんで、悔やみ続ける気持ちを抱えたままでいても、いいと思うのです。なぜなら、大切な方の死を迎え、一年が「あっという間だった」と思う方もいれば、「あの日から、止まったまま」と思う方もいらっしゃるのですから、「時間」ではかれるものでは決してないと思うからです。周りの方が元気づけようとされるお気持ちは尊いことです。ただ、本人が立ち直ることを信じ、そっと見守ることが必要な時もあるのではないでしょうか。

ある娘さんのお話です。十代の頃、お母さんを事故で亡くされ、その後はお父さんと二人暮らし。七回忌が近いということでお父さんがお寺に来られ、ひと通りの話をした後、「娘は来られるだろうか」と呟きました。「お身体でも…」と尋ねると、引きこもりだという。話によれば、お母さんがお亡くなりになられ、数年経った頃から徐々に外出が減り、最近は一日中部屋で過ごすことが多くなったと言います。

また、部屋の中は荷物やゴミが散乱し、どうにかしたいが、どう接したらよいのか分からず悩んでいると言う。お母さんが大好きだった娘なので、この法要が一つのきっかけになればと考えているとのことでした。

法要の前に私は、「大好きだった方、大切な方がお亡くなりになられてから、たった数年で私たちの心はそう簡単に整理できるものではないと私は思います。ですので、この法要中は故人様を想い、今胸の中にどの様なお気持ちがあるのか、しっかりと確かめて頂きたいと思います。心の整理を回忌という時間の物差しではかるのではなく、心の物差しではかって頂きたく思います。」そう話しました。娘さんの視線はうつむいたまま、一点を見つめていました。

法要の数日後、お父さんからお手紙が届きました。そこには、「娘と数年ぶりに向かい合って話し、先日の法要で、娘にも自分にも、まだまだ寂しいという気持ちが強く残っていることに気づいたということ。また、娘さんは、母を失った父をこれ以上悲しませたくないと無理をして明るく振舞い続け、それに疲れてしまったこと。お母さんが亡くなる数日前に些細なことで口論になり、まだ謝っていなかったこと。引きこもっていたその部屋は、生前母親がよく過ごしていた場所で、母親の死を認めたくないあまり、自分が使い散らかすことで、まだ生きているかの様に感じ、それで心のバランスを保っていたということ。そして、彼女の今の気持ちは、「お母さんに、会いたい。そして、謝りたいこと」だと綴られていました。

冒頭の法然上人の言葉と意味を記し、私は返信しました。「会って謝りたい気持ちに」気づかれた彼女にとって、法然上人のこのお言葉はとても大きな希望となったことでしょう。そして、彼女は今日もきっと「南無阿弥陀仏」と称えていることでしょう。お母さんに会って謝るために、西方極楽浄土に往生するために。

合掌

執筆　阿弥陀寺　加藤　健一

表紙の解説　徳本上人（とくほんしょうにん）

「南無阿弥陀仏を称えれば、誰もが救われる」

法然上人が説かれたその「みおしえ」は、いつでもどこでも誰でもどんな時でも実践できる、仏教の中でも最高・最良の実践行だと言われています。表紙の絵の徳本行者は、そのお念仏の生涯を貫き通した、まさに「行者（ぎょうじゃ）」と呼ばれるにふさわしいお方です。平成二十九年、二百回忌を迎えます。

生まれは紀伊の国日高郡（和歌山県）。四歳の時に幼な友達の急死にあい、母の話を聞いて無常を観じて以来、念仏を称えるようになります。九歳で出家を志すも長男であった為許されませんでしたが、十歳を過ぎるといつも数珠を袖に入れて日課のお念仏をするようになります。ある大雪の日、白髪の老人から頂いた一枚の紙が『一枚起請文』で、「往生極楽の明証はこれに過ぎるものはない」と、それから生涯、その『一枚起請文』を襟からかけて念仏に励みました。二十七歳で出家を許され、出家修行の身となり、「徳本」と名を改め、それからも苦修練行にはげみ、お念仏を続けました。自ら不断念仏の実践を続けるだけでなく、多くの人々にも日課念仏を勧め、近畿地方、関東諸国、信濃・飛騨・加賀・越後等の各地を巡ってお念仏を勧め、その名残は各地に（表紙絵にある）独特の字体で書かれた名号・および名号碑（石・塔）、信者による徳本講として現在に伝えられています。文政元年（一八一八年）、「南無阿弥陀仏　生死輪廻の根をたたば　身をも命も　おしむべきかは」の歌を残し、六十一歳の生涯をとじました。

合掌

解説執筆　東源寺　押野見　孝道

徳本上人にゆかりある埼玉浄土宗寺院

◆逸話が残る寺院（名号碑あり）

本庄市　円心寺（本庄市本庄3丁目3-2）

上人五八才の時、一週間滞在され、念仏百唱会を行い、一四〇〇人の信者が参集した。十三世住職徳住上人は、徳本上人に感銘を受け、弟子入りして行脚に同行した。

川越市　大蓮寺（川越市元町2丁目8-25）

上人六〇才の時、三日間にわたり、赤間川（現新河岸川）の水死亡霊施餓鬼放生会を執り行う。

◆名号碑がある寺院

上尾市　相頓寺（上尾市五番町14-2）
上尾市　十連寺（上尾市今泉156）
上尾市　馬蹄寺（上尾市平方2088）
川越市　見立寺（川越市元町2丁目9-11）
川口市　専称寺（川口市上青木5丁目3-43）
川口市　西福寺（川口市西川口3丁目24-13）
戸田市　常福寺（戸田市中町2丁目-4-11）
桶川市　浄念寺（桶川市南1丁目6-11）

平成二十九年　埼浄青調べによる

SAIJOSEI

発行　埼玉教区浄土宗青年会　会長　大和田教仁
広報編集局長　宝田円道

無断複写を禁止します